

まつもと 公民館報



シリーズ 受け継ぎ伝える松本のたから 36

松本市重要無形民俗文化財 まやどころ 入山辺厩所の貧乏神送り

無病息災を願う
こと八日の行事

2月8日(木)こと八日の貧乏神送りが行われました。

早朝、各家々の木戸先では初穀や唐辛子などをいぶしたり、餅をついて道祖神碑に供え、塗りつけたります。

午後は町内公民館に藁を持ち寄り、大きな藁馬とジジ・ババと呼ぶ人形を作ります。その馬を中心にして車座になり、長老が鉦をたたいて皆で数珠を回し、念仏を唱えます。

それが終わると藁馬を担ぎながら、「貧乏神追い出せ、貧乏神送り出せ」と唱えながら、薄川まで運びます。そこで再び数珠回しをして藁馬を焼き払い、後ろを振り向かず、町内公民館に戻ります。

こと八日の行事も休日に行うところが増えています。厩所では毎年2月8日に開催しています。

未来につなぐ市民活動研究集会

第33回公民館研究集会 地域づくり市民活動研究集会

平成30年2月18日(日)、松本市中央公民館で、第33回公民館研究集会が「学びを生かした住民自治力で地域の未来を創る」をテーマに開催されました。

午前中の全体会から対談を、午後の分科会から第4分科会と第7分科会の様子を紹介します。(関連記事5面)

未来につなぐ市民活動研究集会

松本市の地域づくり ● 対談

全体会では、白戸洋教授(松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科)と、牧野篤教授(東京大学大学院教育学研究科)による対談が、行われました。

地域づくりを考えるにあたり、「地域づくり、地域課題を前面に出しすぎてハードルが高くなってしまっている。まず問題提起から始まるが、悪いと



全体会での対談

ころだらけなのか」と投げかけました。良いところや出来ているのを見て、掘り起こし、伸ばし、楽しみにしていく。そこに取り組んでいる人の役割が生まれ、高齢者は生きがいにつながるかと話しました。

地域のあり方として、「会社で働くようになり、地域で行う大半の行事が会社の行事に移行したが、子育てなどは地域に残った。地域が変化したことを考えなければならぬ」と説明しました。社会保障制度も変化してきた現在、私たちは生活というものをどこかで組み直さなければならず、若い力を呼び込み、認め、取り込んでいくことが必要であると話していました。

分科会に向けて、白戸教授より「地域課題という言葉と、一人一人が抱える悩みとが少しずれていくような気がします。一般論ではなく一人一人の思いが

くみ取れる議論になればいいと思います」と、また牧野教授は「社会構造が個人と家族と会社と国であったものを、個人と家族と社会(コミュニティ)と少し横に広げ、もつと従来と違う新しい楽しい生活をしていく、というかたちを考える必要があるのではないかと」とそれぞれアドバイスをいただきました。

高齢化社会を支える地域の力

● 第4分科会

政府は、団塊の世代が75歳以上となる2025年を目前に、地域包括ケアシステム(※用語解説)の構築を目指しています。

4月には「病院・施設完結から地域完結へ・自立支援・自己責任」を目指して医療・介護制度が抜本改定されます。

松本市では「地域包括支援センター」を中心に、35の「地域づくりセンター」で学習やネットワーク作り、人材育成に取り組むなかで事例を積み上げ、持続的なシステムを構築する活動を展開していることが報告されました。

用語解説

地域包括ケアシステム

誰もが、どんな状態(寝たきり・車いす・認知症等)であっても、住み慣れた自宅や地域で暮らし続けられるように、医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供される仕組み

安全安心な町づくり

● 第7分科会

29年8月の台風接近に伴い開設した中山公民館の避難所運営の事例や、大手公民館で実施した市内初の要援護者避難所の運営訓練の事例、HUG(ハグ)と呼ばれる避難所運営を学ぶゲームをもとに、要援護者・付き添ってくる人・受け入れる人の三者の視点から、要援護者優先避難所の運営を考えました。

大規模災害が起きた際には、市民・行政が協力して避難所を運営する必要があります。地域の中で避難所開設・運営の仕組みをあらかじめ作り、住民意識を高める学習会や、運営訓練を重ねておくことが重要だということが分かりました。



避難所仮設用品を体験する参加者

一日を終りで

● 明日につなぐ

各分科会では笑い声が出たり、グループ討議は肩ひじを張らず行われたりしていました。対談にあつたように、年齢・性別を問わず皆で楽しく取り組んでいくことが、未来を創る力になっていくと感じました。

松本さんぽ

～冬の青い鳥～

幸せを運ぶ青い鳥といえば夏鳥のオオルリがイメージされます。しかし、冬期に青が目立つのがこのルリビタキ(オス)。スズメ程の大きさで漂鳥として全国で確認されています。主に昆虫類や木の実を採食。市内では冬のアルプス公園や里山で低木と地上を上がったり下がったりする姿を見かけます。オスに比べてメスは地味ですがクリツとした目は愛らしく、人気があります。



(撮影：2018.1.31 アルプス公園)

市民活動商店街



お弁当、もう売り切れました!

2月18日(日) 中央公民館で、松本地域を中心に地域づくり・市民活動に取り組んでいる団体が、日ごろの活動について紹介しました。

交流企画「福引」もあり大盛況でした。特に障がい者支援団体「てくてく」の弁当販売は、長蛇の列ができて即完売でした。

団体名と主な活動内容

▽てくてく 障がい者の就労支援を目的としたカフェ営業▽大庭公民館居酒屋「おれんち」身近な交流の場として公民館で居酒屋▽中信多文化共生ネットワーク 多文化共生のまちづくり、

市民活動を全市へ紹介

松本市を中心に活動している団体を紹介する市民活動商店街が、第33回公民館研究集会の一環として行われました。

日本語教育、外国人相談▽まつもと震災支援ネットワーク 東日本大震災の避難者との交流・学習会▽よりそい福祉バンクまつもと 物資の提供などによる生活困窮者の支援▽フリマネットワーク 市民交流の推進、リユースフリーマーケットを通じた社会活動▽ワーカーズコープ松本事業所 児童館などの運営、託児事業やこどもの居場所事業、フードドライブの取り組み▽松本市消費者の会波田地区 不要食器の再資源化と埋立地の延命化活動▽上高地線応援隊 引退電車で

地域コミュニティづくり、出張プラレール活動▽ゆめまるHAPPY隊 波田でシェルターを構え、犬の保護譲渡活動▽中央公民館図書委員会 イベントや選書を通じ図書の普及を図る活動▽松本ヘルス・ラボ 市民の健康増進、健康産業の創出・育成▽松本市健康づくり推進員連合会 学習や実践を通じて、健康に関する情報の普及活動▽館報編集委員会全市版 公民館報全市版の編集、まつもとの今昔のパネル展示▽松本市地域づくりインターン 配属地区の特色や課題に応じた地域づくり▽おにぎりチャレンジ隊 家族団らん手づくり料理を楽しむ日及び地産地消の推進▽松本市市民活動サポートセンター 市民活動の場や機会の提供・支援活動

会場の声



おにぎりの中身、何にしましょう?

参加者の方は、「多くの活動団体があることを知った、頑張ってる欲しい」などの感想を寄せていました。

また参加団体の方は「多くの皆さんに活動を知ってもらえて嬉しい」「昨年秋季開催の市民活動フェスタ以外の団体の活動を知ったり、情報交換が出来たりして、有意義だった」との声がありました。

写真でつづる まつもとの今昔 ③7

～ 朝日街道 ～



昔

(1943年頃 写真提供:芳川公民館)

博労町の南、薄川堤防沿いから鎌田を経由し、朝日村に至る通称朝日街道。場所は二子橋の北東、野溝と石芝の辺りの様子。右手前の土手は、昭和30年代初頭まで残っていた。



今

(2018.3.4 撮影)

現在の同じ場所から撮影。

おこひる

「君、転勤先は横浜と松本のどちらがいいかね」「任期はどのくらいですか」「2〜3年位だ」「では、静かな松本にします」そして、37

年が過ぎた。今では、物知り顔に松本の「うんちく」を語っているが、昨年「おこひる」の意味を教えてもらったばかりである。▼10年ほど前から登山を始めた。特に美ヶ原は年間を通して登っている。王ヶ鼻からは眼下に松本平の見事な扇状地が広がり、その先には白く雪化粧をした北アルプスの山並みが一望できる。ため息が出るような眺めである。夏には、色とりどりの高山植物が咲き競う標高二千メートルの台地は高山植物の宝庫である。▼松本平は、縄文時代には、すでに大きな集落が点在し、古墳も桜の名所になった弘法山を筆頭に各所にある。古代からその文化は引き継がれ、現在へと繋がり、歴史ある城下町へと発展してきた。▼国宝松本城をはじめ、各所に歴史遺産がある程である。私も六十半ばであるが、これからも松本の「うんちく」を増やしたいと思う。

歴史探訪 探る松本 4

古く「新しい村」今井地区

平成30年1月1日現在、人口は3,930人。松本市の西南部に広がる農村地帯で、果物の栽培が盛んな地区です。昭和29年8月に東筑摩郡より合併しました。

今井は「新しい村」

今井は平安中期頃に開かれたと伝わっています。今井の意味は、「今」「新しい」、「井」「村・人の住むところ」で、周囲の塩尻市洗馬や宗賀などよりも新しいとされています。平安末期には、木曾義仲の四天王のひとり、今井四郎兼平が開拓し発展させました。兼平にまつわる史跡が多く残っています。

水不足への対応が、農業の発展の歴史

かつては水不足でも生育できた桑を利用して養蚕が盛んで、小さな製糸工場がいくつもありました。その後は、大規模に大根を栽培し、村内の工場で漬物にして出荷していました。

果樹の生産の歴史は古く、ブドウ栽培は明治27年から、リンゴは明治43年から始まっています。昭和25年からは「ア



今井ふるさと歌留多で遊ぶ子どもたち

ルプスりんご」のブランドで販売されました。昭和30年代後半に入り深井戸が掘られ、その後、中信平右岸土地改良区の開発事業により梓川から水を引けるようになると、水不足が解消されて、果樹栽培や米作りが盛んになりました。

地区内の史跡、偉人、文化をまとめた「今井ふるさと歌留多」や、民話や言い伝えをまとめた「今井紙芝居」「絵本」は小学校での授業にも使われ、親しまれ、貸出もされます。



道の駅会員の似顔絵／瓶詰めジャム

発展する今井

平成21年8月に道の駅「今井恵みの里」が開設されました。農産物直売所、食堂、多目的交流施設からなっています。直売所への出荷は、会員の自主性を重視し、農業者の意識を高く保っています。

また、道の駅に併設される農産物加工場では、これまで規格外品として出荷できなかった作物を、ジュースやジャムに加工し販売して、農家の新しい収入源となっています。農業従事者の高齢化や遊休荒廃農地の増加が問題となっていますが、JA松本ハイランド農協などを中心意識の高い若者を新規就農者として招き、指導・支援をしながら、現在10人ほどが果樹・野菜栽培に励んでいます。

わがまち自慢第20回

春の訪れを告げる

四賀福寿草まつり

3月に四賀地区赤怒田の福寿草群生地で開催されたまつりには、期間中5万人の来場者が訪れました。

自然の土手に群生する日本の原産種50万株を地元の人々が草刈りや整地をして保全しています。それらは寄付により賄われています。多少傾斜がありますが、遊歩道も整備されているので、車いすの方の来場も可能です。

今年3月10日(土)のオープンイベントを皮切りに、21日(水・祝)まで開催されました。前夜に降った雪がうつつ

らと積もる中、オープンイベントでは、四賀小学校金管バンド、虚空蔵太鼓、アルプホルンの演奏など賑やかな会場では、豚汁や卵かけごはんの無料サービスも行われました。1.5ヘクタールの土手が黄金色に染まるさまは、一見の価値あり、四賀の自慢でもあります。



地産地消のかんたんレシピ

ヘルシーステーキが登場 『豆腐ステーキ』

冷奴がステーキに!!

材料：木綿豆腐、カツオ節、オリーブオイル、ワケギ、マヨネーズ、カツオつゆ、小麦粉

1. 豆腐は水切りして、厚さ1.5cmに切る
2. 小麦粉を両面につけて、フライパンで焦げ目がつく程度に焼く
3. 皿に盛りマヨネーズ・カツオ節・ワケギを散らす
4. 2倍に薄めたカツオつゆをかける

